

# 古代岩絵の観光資源化による地域振興の試みに関する考察

—ナナイ人の居住するロシア極東シカチ・アリャン村の事例—

A Study on the Attempt of Regional Development by

Using Ancient Petroglyphs as Touristic Resources

: The Case of Russian Far East, Sikachi-alyan village where Nanai people live

井 出 晃 憲\*

Akinori IDE

## <目次>

1. はじめに プロジェクトのあらまし
2. アムールランドの重要性
3. アムール川と先住民族分断の歴史
4. 現代の少数民族としてのナナイ
5. 国際的な河川汚染問題
6. 岩絵の概観
7. 岩絵の類型とその起源
8. 創世神話と岸壁画のカテゴリー
9. 採拓作業
10. 企画展の概要
11. おわりに 先住民族文化の観光資源化に向けて

## 1. はじめに プロジェクトのあらまし

ナナイ民族、そして彼／彼女らが集住するシカチ・アリャン<sup>1</sup>という村落が存在する。

ナナイの名は、アルセーニエフの著書で黒澤明の映画にもなった『デルスウ・ウザーラ』<sup>2</sup>でも知られる。ナナイ民族は、アムール河中流からウスリー河、松花江にかけて、つまりロシアのハバロフスク州、沿海州、中国の黒竜江省に

またがる地域に分散居住する先住民族である。<sup>3</sup> “ナナイ”は自称で“土地の人”を意味する。ロシア側ではかつてゴリドという呼称で呼ばれ、中国側では現在に至るまで赫哲（ホジェン）と呼ばれている。言語的にはツングース語系諸族のひとつツングース・満州語派に属し、付近に居住するウリチ・オロチ・ウデゲ・オロッコ各民族と同一グループを形成しており、文化的にも“沿アムール文化”という共通性を持つ。つまり、川岸や中島での定住集落、干し魚（ユッコラ）を主食とする魚食生活、丸木舟や犬ぞり、夏の家と冬の家（堅穴住居）、氏族（ハラ）組織、さまざまな狩猟・漁労儀礼とシャマニズム、熊と虎を神聖視する観念と神話、射日神話などである。<sup>4</sup>

シカチ・アリャン村は、ハバロフスク市から北東に80kmほど離れた場所に位置する人口わずか300人ほどの村で、ナナイ民族を主体とした少数民族村として名高い。また当地のアムール側の岸辺には1万2千年前と推定される古代岩絵が点在することでも有名である。

本稿では、村おこしの一環として、その古代岩絵の観光資源化という現在進行中のプロジェ

\* 文教大学湘南総合研究所客員研究員

1 旧称はサカチ・アリャン。現在はシカチ・アリャンと呼称されている。

2 アルセーニエフ著／長谷川四郎訳『デルスウ・ウザーラ 沿海州探検行ー』（平凡社東洋文庫55・1965年）

3 統計によると、ロシア側に1万1883人（1989年）、中国側に4254人（1990年）という。（『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）830頁による。）

4 これら文化的特徴は『ロシア・ソ連を知る事典』（平凡社・1989）412頁による。

クト<sup>5</sup>に関連して進めてきた2008年の現地調査の結果を報告する。今回の現地調査は日本での展覧会の実施を目的に古代岩絵の拓本を採取することが主な目的であった。

それとともに、ナナイ民族などが居住するアムールランドと呼ばれる地域の重要性や、先に国連で採択された「先住民族の権利に関する国連宣言」などにも触れ、少数先住民族村における古代遺跡の観光資源化のあり方について考察することとする。

## 2. アムールランドの重要性

アムールランドとは考古学上の用語であり、アムール川流域はもちろん、その周辺領域さらにはサハリンから北海道まで含めて、似通った遺物が出土する地域である。この地域の先住民族はかつて国家を建設したものもあり、また文化の特徴には汎ユーラシア的要素が見られる場合もある。さらに地理的に日本とユーラシア大陸をつなぐ結節点の一つとなってきた。ナナイ民族の居住するシカチ・アリャン村もアムールランドのただなかに位置する。

歴史上、同地域の黒水靺鞨は金帝国を成立させ、粟末靺鞨は渤海国を形成した。黒水靺鞨はナナイ民族につながる。同地域のツングース系諸民族の一部は過去において大規模な国家を築いたのである。

シカチ・アリャンに存在する岩絵には、突厥の石人の技法と同じものが見られ、顔面表現においてトルコ系との交流が想定される。つまり、シカチ・アリャンの岩絵の文化的特徴は汎ユーラシア的広がりを持つ可能性がある。

また、民俗学的事象から云えば、当地の狩猟文化や漁労文化などは近隣地域との間に類似性があることが指摘されている。例えば、自動弓の技術であるが、台湾で「弩弓」と呼ばれるものと基本的に同じものであり、さらに北海道アイヌのアマッポやクワリと呼ばれる罾も同様である。「自動弓やチェルカーン（弓式圧殺罾）に見られる洗練された技術－例えば、自動弓の照準器や弓を放つトリガー部分の調節溝など、ひとつの自動弓で多種の動物を狙える工夫－はアムール川流域のみならず、南は台湾、北はレナ、ヤナ川流域、そして北海道にいたるまで、ユーラシア東方に普遍的に見られるものである。」<sup>6</sup> また、丸太や平板状の氷や岩石を用いた罾も北方帯に広く分布し、「日本のヒラ、オソ、ウッチョウ、ヤマ、あるいは北海道アイヌのホイヌアクベなどと称される重力式罾が存在するように普遍的に分布している。」<sup>7</sup> 「すなわち、沿海地方のウデヘ・ナーナイからサハ共和国、エヴェンヤヤクートにいたるまで少数民族が使用してきた伝統的な毛皮獣および鳥類用の罾とされるもののほとんどが、日本も含めて中国、台湾、あるいは北欧、ヨーロッパロシア、北米と、中緯度帯から北方帯にかけて普遍的に見られ、決して当該地域に限定されて存在してきたものではないということである。」<sup>8</sup> さらに、「このように普遍的分布を見る罾類に関して、16～19世紀に展開された毛皮交易と結びつけて捉える見方は危険であろう。なぜなら、日本列島本州島以南から八重山諸島に至る地域のように、必ずしも毛皮交易と深い関わりを持っていなかったと考えられる地域においてもこの種の罾が見られるからである。すなわち、これら罾類の形態的

5 このプロジェクトは特定非営利活動（NPO）法人ユーラシアンクラブによる。当法人は、1991年以降長年にわたってシカチ・アリャン村を基点にナナイ民族の自立支援を行ってきた。このプロジェクトも自立支援の一環として村に提案して進行中である。

6 田口洋美「アムール川流域少数民族の狩猟漁撈活動」大貫静夫・佐藤宏之編『ロシア極東の民族考古学』（六一書房・2005年）41-42頁

7 田口洋美 前掲書 42頁

8 田口洋美 前掲書 42頁

視点からの普遍的な分布は、世界システム形成期、毛皮交易の影響とばかりはいえないのである。」<sup>9</sup>ここから、罌類の普遍的分布によってはるか昔から地域間交流が活発であったことが推察される。

日本との関係から云えば、斎藤君子は当地のナナイのフォークロア調査によって口承伝承を採録した際、日本にまつわる話を3つ採録した。その中では日本をシサンと呼称しており、アイヌ語のシサムとの関連が想定される。<sup>10</sup>また、シカチ・アリヤンには、舟をかたどった岩絵が数多く点在するが、それは北海道余市にあるフゴッペ洞窟の岩絵に酷似したものであり、両者の製作年代はことなるものの、何らかの関連性が想定できる。さらに、時代は近くなるが、江戸時代には鎖国政策のなか北方の窓口として、サンタン交易が活発に行われ、蝦夷錦などが日本にもたらされたそのルートにも当たる。<sup>11</sup>

ところで、大阪医科大学の松本秀雄教授は日本人の起源がバイカル湖にあるとするバイカル起源説<sup>12</sup>を主唱しているが、このアムールランドは両地域の懸け橋として重要な意味をもつとされる。

以上述べてきたように、アムール川流域の諸民族は、周辺地域との関わりにおいて大きな役割を果たしてきた。だからこそ、当該地域の先住民族が文化の継承者として自立・共生することに大きな意味があるのである。

### 3. アムール川と先住民族分断の歴史

アムール川は北東アジアにおける随一の大河

であり、中国、モンゴル、シベリアといった各地域を結ぶ交通の手段として重要であり、古来周辺国家の対立を生み、その流域を舞台としてさまざまな民族が興亡を繰り返した。清代に至るまでにこの川の流域を領有した王朝としては、渤海、金、元、明がある。だが、本格的な国家間の対立の場と化したのは、17世紀以降の東方へ拡張してきたロシアと清朝との間の紛争以後である。

1689年のネルチンスク条約では、アムール川に流れ込む支流の流域がすべて清朝の領土とされて一応の決着がついた。

ロシアはその後、カムチャッカ、アラスカ方面への進出に注力するが、毛皮の中国への販路を求めて再びアムールに現れた。当時の清朝はアヘン戦争に敗れ太平天国の乱に苦慮しており、アムール方面に注力することができず、ロシアは1858年のアイグン条約と1860年の北京条約によって、ウスリー川河口より上流の右岸を除くアムール川流域全域を割譲させ、アムール川の航行権を獲得した。

1991年のソ連崩壊後、中国とロシアの関係が好転したことから国境問題の話し合いによる解決が図られ、今日ではアムール川上の全島の領有権の問題も解決された。また、河川航行が自由化され、国境貿易も活発になっている。

だが、国境線が確立してロシアと中国に分断された当地の先住少数民族のことはあまり論じられない。当地の少数民族先住民族も他の例にもれず固有の言語・文化・生業を維持するのが非常に困難な状況に陥っている。ロシア・中国両政府がともにロシア人あるいは漢族の移住を促進

9 田口洋美 前掲書 42-43頁

10 斎藤君子「ナナイのフォークロア調査報告2」53-59頁『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第15号（2006年）

11 佐々木史郎『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』107～149頁（日本放送出版協会・1996年）に詳しい。

12 松本秀雄『日本人は何処から来たか』（日本放送出版協会・1992年）

世界に分散する蒙古系民族のGm型を調べているうちに、そのGm遺伝子の分布や流れによって、蒙古系民族の移動の跡を辿ることができ、日本民族のルーツの解明を含めた蒙古系民族の特徴がはっきりした姿で描きだされたのである。

蒙古系民族は「北方型蒙古系民族」と「南方型蒙古系民族」の二つのグループに分かれる。そして「日本民族は北方型蒙古系民族に属し、そのルーツはバイカル湖畔にある」との結論が得られたという。

し、ナナイ人の狩場だった森林を伐採して農場にし、生活の糧であった魚類を乱獲しているのである。そうした結果、ロシア領内では言語・文化のロシア化、中国領内では漢化が進んでいる。<sup>13</sup>

#### 4. 現代の少数民族としてのナナイ

冷戦崩壊後、ロシア・中国両政府が開放政策をとりはじめた今日、ようやく先住少数民族の間でも土地に対する優先的な権利や固有の言語・文化の回復を主張する動きが見られるようになってきている。シカチ・アリャン村において、古代岩絵の観光資源化による地域振興を行おうというプロジェクトも、こうした近年の動向の中の一つの現れである。

それでもなお、固有の言語、文化、生業を維持するのが困難な状況になっていることには変わりはない。例えば、中国、ロシア（ソ連）双方の公教育の普及もあって、若者たちが固有の言語を使わなくなったからである。旧ソ連におけるナナイの固有言語率は44.1%（1989）で、1980年代に過半数を割ってしまった。<sup>14</sup>

そのような情勢に対し、言語や文化の教育を公教育に取り入れようという動きがある。しかし、すでに知識の豊富な母語話者の老人たちの数は非常に少なくなっており、文化復興の前途は多難である。

例えば当地の口承文芸の調査を行った斎藤君子は、調査のインフォーマントとしてナナイ語を母語とする者を探す苦労を述べている。<sup>15</sup>

#### 5. 国際的な河川汚染問題

そうした状況のなか、国際河川であるアムール川が思わぬ災害に見舞われることとなった。2005年11月13日に発生した中国吉林省吉林市の中国石油吉林石化会社のベンゼン工場での爆発事故によって、ベンゼンおよびニトロベンゼンの汚染物質が推定100トンも流失したのである。<sup>16</sup> その影響は大きく、汚染物質は松花江から下流のアムール河にも到達し、シカチ・アリャン村をも襲った。そのため生業である漁業が原則的に禁止され、村の中心的な収入源であるサケ・チョウザメの類が獲れなくなり現在深刻な存亡の危機に直面しているのである。猟師であった村の男たちは多くが現金収入のために出稼ぎに出て、村には女性や子供たちの姿ばかりが多く、活気がなくさびれた様子であった。<sup>17</sup>

#### 6 岩絵の概観

シカチアリャンの岩絵を調査した学者として、最も著名なのは、アレクセイ＝パヴローヴィチ＝オクラードニコフ博士（1908～1981）である。博士は長年レニングラード物質文化史アカデミーに所属するとともに、レニングラード大学教授として史学部および東洋学部でシベリア・極東の考古学を講義した。極東の調査では、1935年にアムール河流域をハバロフスクから河口まで調査したのを皮切りに何度か調査を行っている。<sup>18</sup>

ここでは、少し長くなるがオクラードニコフのモノローグを引いて、シカチ・アリャンの岩

13 『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）64, 65頁による。

14 『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）830頁による。

15 斎藤君子「ナナイのフォークロア調査報告1」36, 37頁『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第14号（2005年）

16 在瀋陽日本国総領事館HPより [http://www.shenyang.cn.emb-japan.go.jp/jp/connection/security/security\\_1\\_16.htm](http://www.shenyang.cn.emb-japan.go.jp/jp/connection/security/security_1_16.htm)

17 東京新聞「古代岩絵で村おこし」（2009年1月5日）参照のこと。

18 菊池俊彦「オクラードニコフ博士—その生涯と業績」7～10頁『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社・1982年10月）



絵を概観することとしたい。

「アジア大陸の古代住民の美術史の中で、アムール河岸とウスリー河岸の岸壁画は特別の地位を占めているが、その中でサカチ・アリヤン<sup>19</sup>のものが特に重要である

サカチ・アリヤンとは、ウスリー地方の密林に埋没した、しかし諸国の学者にかなり前からよく知られている小さな部落の名称である。ここには、すでに十九世紀末に有名なアメリカの東洋学者で東洋文化の研究者であったパーソルド・ラウファーも来たことがある。また今世紀の二〇年代には、学界で前者に劣らず有名な日本の鳥居龍蔵教授もここを訪れた。彼は日本、サハリン、満州、モンゴリアの考古学、民族学に関する多くの書物の著者である。サカチ・アリヤンについては、ソ連のすぐれた学者シュテルンベルグもその著作において記述している。シュテルンベルグはグループ婚の新事例を発見し、フリードリヒ・エンゲルスによって敬意を込めて取りあげられた学者である。

われわれの先輩たちと同じように、私たちもまた一九三五年サカチ・アリヤンにおいて、岩の多いアムール河岸沿いに累々と連なる巨大な玄武岩に興味をひかれた。今は死火山となっているが、数百万年前ここの火山の噴火口から灼熱した溶岩があふれ出した。その後それは凝固し、ひび割れ、河水で洗われ、ついには多くの岩塊となって散らばった。そして今もその一つの岩塊が、アムール河のしぶきと泡立ちに洗われて、大河の流れとそこにうつされている青い空と古さを競うかのように、その黒い膚をさらしている。この玄武岩の巨塊もまた、幾百にのぼる他の塊と同じように、遠い昔、地殻の岸壁からくずれ落ちて、流水によって此处に運ばれたものである。

一見したところでは、そこにはなんら注目すべきものは見あたらない。山野にころがる自然

石にすぎない。しかし少し近づいてみると、サカチ・アリヤンにおけるゆるやかな河岸砂浜の岩塊はただものではない。地球の少年期の証人ともいべきこの岩塊には、創造的意図の刻印が見られる。それは、古代芸術の不思議な、そして興味深い空想世界をわれわれの前に展開するのである。幾世紀、さらには数千年の間、この玄武岩の尖った角は丸められ、その表面は磨かれてきたが、無名の古代芸術家の手で刻まれた深い線刻は消されることなく残った。

泥土の河底、その濁水の中から、水中の怪物、つまりアムールの支配者である「黒い竜」が浮かび上がってきた。その細い、モンゴル風につり上がった眼は、外来者を無言の威嚇を込めてにらみすえている。歳月の闇の中からわれわれの眼前に現れたこの不思議な存在の頭部は、逆立った豊かな豊かな毛髪に覆われている。顔面の下部にも同じように豊かなひげが見えるが、中でも奇妙なのはその濃いひげである。画面の下部はすでに古代において失われていた。これはおそらく、画像のある石が他の石とともに転がったとき、氷河の流れの中でそれらと衝突したためであろう。しかし現在残っているものだけでも、見る者にぬぐいがたい強烈な印象を与える。

この驚くべきアムール河岸の、他のいかなる古代芸術の作品とも異なる遺物をひとたび見た者は、もはやこれを忘れることが来ない。ままたぬ自然石にこれだけの溝を彫りこむには、どれだけ多くの労力が必要であったことだろう。工具も金属ではなくて、湿った河岸の砂にころがっているふつうの礫石だったかも知れない。不思議な怪物を表面に彫りこんだ玄武岩塊は、サカチ・アリヤンにおいて一つや二つではない。画像のある岩塊は全部で一〇三 個を数える。これらの全ては、その製作の技法、様式、テーマなどにおいて統一的な文化現象を成している。サカチ・アリヤンの画像は、アジアにおけるこ

19 シカチ・アリヤンの旧名称である。以下同様。

の種の遺物の相対の中でも独特のものであり、一風変わったものである。そこでは、幾世紀の過去から、なにか統一的な文化史的集団がわれわれの眼前に現れる。これは謎に満ち、鮮やかで独自の古代世界の断片である。

・・・

しかしそれにしても、古代の無名の彫刻家によってサカチ・アリヤンの玄武岩塊に彫りこまれたこれら空想的なマスクやヘビ、怪獣はいったい何を物語っているのであろうか。そして、アムール河の贈り物であるこれら沈黙の岩塊は、われわれとともになにかを語りはじめるであろうか。」<sup>20</sup>

以上のモノローグから、オクラードニコフはシカチ・アリヤンの岩絵群に強烈な印象を持ったことが知れる。以下において岩絵の類型とその起源および神話との関連について述べることにする。

## 7 岩絵の類型とその起源

オクラードニコフによる岩絵の類型は以下のとおりである。<sup>21</sup>

まず、画像のレパートリーの第1位はマスク(人面)である。それは、全体の輪郭によって8つの基本的グループ、つまり楕円形、卵形、ハート形、梯形、四角形、上が楕円形で下が真っすぐな四角形、サルまたはどくろ形、輪郭無しに目と口だけを穴で示した分割形に分けられる。第2位はオオシカまたはトナカイの画像である。以下、第3位はヘビ、第4位は鳥、そして、その他に抽象化された小舟がある。

そのうち第1位のマスクについては、祭りの舞踊儀礼、埋葬儀礼、狩猟のパントマイム、死

者の霊、豊穡の呪術的儀礼(死に対する生の戦い、人類の存続) シャーマン(生きている死者、野獣、鳥)のマスク(霊への変容)を表しているとされる。

死者の表現としてのマスク(頭蓋(髑髏)信仰)はメラネシア、ビルマ、インドネシアの首狩りなど南方地域のマスクとの驚くべき類似が指摘される。ゆえに、アムール流域民族の生活情景として、葡萄の房のような死者の頭蓋、首狩りの獲物、眼前にある首狩人の集落、マスクの列、霊の行列、男子秘密結社のセレモニー、シャーマンの作業などが想定できる。「この地に首狩人どもの集落と以上述べたような儀式が実際になかったとは誰が断言できようか」<sup>22</sup>とオクラードニコフは述べる。

岩絵の起源については以下のような伝説がある。シカチ・アリヤンのナナイ族の間では、岸壁画を残した者については、ナナイ族の神話的祖先である「ハ」であろうという説があるが、実際には以下のように考えられている。

オクラードニコフはアムール編み目文(菱形の格子を形成する帯状の文様)」のタイプはアムール地方種族において現代まで伝わっており、それが現代的文様の元祖であることは疑う余地がないとしている。一方、ラウファーは文様が中国起源であると仮定している。

また「渦巻はアムール地方の文様の「魂」である。それは現代のナナイ族またはニブヒ族の文様であるだけでなく、サカチ・アリヤンその他の岸壁画におけるさまざまなテーマの主要な要素をなしている」<sup>23</sup>というように、渦巻きも特徴的なデザインである。

また、岩絵製作の年代について、1万2千年前と推定されると書いたが、その根拠は以下の

20 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の一元流—』(講談社・1974年)90-93頁

21 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書93-102頁

22 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書105頁

23 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書112頁

理由による。シカチ・アリヤン村にほど近いアムール川沿いの河岸段丘にガーシャ遺跡と呼ばれる古代の住居址があり土器が出土した。その土器を放射性炭素を用いた年代測定で測ったところ、前12960年プラスマイナス120年と出たのである。そこから、付近のアムール川岸の岩絵群も同時代のものと推察されたのである。<sup>24</sup>

## 8. 創世神話と岸壁画のカテゴリー

この項では、アムール川岸の岩絵群とナナイ民族の創世神話との関連について考察することとする。「芸術的伝統の連続は、したがって様式、芸術形式、具体的テーマだけでなく、これらのテーマに結びつく理念（イデー）の継承の可能性を意味している。言い換えれば、現代のナナイ族の神話や民間伝承の中に、アムール河岸とウスリー河岸の不思議な岩壁画世界をつくり出した理念は残されていないだろうか。そして実は残されていたのである。」<sup>25</sup>とオクラードニコフは述べている。

以下において、オクラードニコフの分類に従って6つのカテゴリーに分けて個々述べていくことにする。

### a 三つの太陽と射手

「ナナイ族は、これらの画像がいつ誰の手でつくられたかの問に対して、その起源が三つの太陽と偉大な射手のいた神話的時代、創世の時代と結びついていると異口同音に答えている」<sup>26</sup>

ナナイ族の創世神話を初めて記録したのはバーソルド・ラウファーであるが、ここでは日本人研究者風間伸次郎が採録した射日神話を紹介しよう。<sup>27</sup>

「三つの 太陽が 強く 輝いていた、と言う、それ（暑いことには）魚が 上へ 跳ねれば、夏に、上で ひっくり返って 死ぬ そんなだ、そうして あの、一人の 人が 行った、と言う、ザクソル氏。それから 行ってから、二つの 太陽を 殺した、と言う、輝いていたのを、一つになった。そこから 戻ってきて、自分の神像を 何でも 全て しまった、持ってきて 自分の胸に 置いたのだ、大事にしまったのだ。彼が 魚を つかんだ、上に いるのを、そこで ハンマーでうった、石を 置いて 水へ 戻した、（そうすると）自ら 全て 生き返った。そんな風になって 戻ってきたと言う、それから 彼は 戻ってくると、どうした、家に 着いた、彼は 閉ざしたのだ、かまどを、窓を、全て 閉ざした。彼は 神像を 長椅子に 置いた、それ（神像）を 胸の所から 出した。そうして 並べると 見た。全て 消えてなくなった。それから 天窓の方を見た、昔（の家）は このようであった、天窓が あったのだ その頃、ナーナイ人の家には。天窓から スーッと そこへ 飛んで行った。

さあ、その天窓を 最初に 閉めていた ならば、他の 場所には 誰にも シャーマンはいなかったはずなのだ、ただ ザクソル氏にのみ いるべきだったのだ。それは その 神像は 飛んで行った、降りた場所では あの オネンコ氏も シャーマンとなり、キレ氏も シャーマンと なった、他の氏族も シャーマンになる、 そうなったと 言う、あの カラスは その ひどく 太陽が 輝いている時に、上に いた、と言う、そうすると 黒く 黒く なった、カラスは。あの、カササギは 石の 間に 隠れていた と言う、その外に現

24 大貫静夫著『世界の考古学』東北アジアの考古学』（同成社・1998年）36頁

25 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書119頁

26 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書119頁

27 風間伸次郎採録・訳注『ナーナイの民話と伝説』183, 184頁（小樽商科大学言語センター・1995年）

れていた部分は 全て 黒く、その 石の 後ろに あった部分は 白く なった と言う、それは、あのカササギは 模様つきに (なった)。そこまでなのだ、その伝説は。』

この話は数ある射日神話のうちの一つのバージョンである。ツングース・満州語派に属して同一グループを形成するナナイ・ウリチ・オロチ・ウデゲ・オロッコなどの各民族はそれぞれ多くの射日神話を伝承してきた。

これらアムール・サハリンと沿海州に居住する各民族の伝統文化には、起源を異にするさまざまな要素が認められる。土着の基層文化以外に、北方トングース語系の民族（エヴェンキ、エヴェン）と共通する文化、チュルク・モンゴルのな特徴、満州・中国からの影響などが認められるのである。この文化の多源性は、神話・伝承についても明らかに認められる。<sup>28</sup>

#### b 鳥のモチーフ

オクラードニコフは「大地を創造するために、原初の大洋の水に潜る鳥のモチーフは、全人類的モチーフの一つである。これは地球上の多くの民族に広まっている天地創造神話における大地の創造者は、はじめ人間態的存在ではなく鳥類であったこと、それも第一に白鳥、カモ、ガンなど、もぐることのできる水鳥類であった」<sup>29</sup>と述べている

シカチ・アリヤンの岩絵にも水鳥類の画像は少なくない。それはアムール地方の初期神話、具体的には創世神話において水鳥類が実際に重要な役割を果たしたからであろうと推察できる。

さらに、「水鳥類、カモまたは白鳥が、世界樹のことを語る神話において特に重要な役割を果

たしているという事情も偶然とは言い難い。世界樹の枝に巣があり、彼岸の神秘的世界にある一般人またはシャーマンの霊がそこで育っているとされている。これらの霊は、水鳥、カモの相貌をもっている。ナナイ族の観念によれば、“三本の世界樹があった。一つは空に（そこにはすべての霊が生まれるまでの間羽のないカモの形で棲んでいる）、同様なものが地下の世界に、三つ目は地上に、つまりシャーマンの付属品を持つシラカバ”の形においてである。これらの鳥は宇宙開闢に関与しており、宇宙の姿に相通じている」<sup>30</sup>とオクラードニコフは記している。

#### c 竜と蛇

「ナナイ族の芸術の「竜」、すなわち神話的な天の蛇または水蛇は、ナナイ族によって中国から借用したものであるとの狛介が通説となっているが、しかしこの蛇の名称そのものが、その現地起源を物語っている。ナナイ族はそれを借用後の「ルン」ではなく、「ムドゥル」という言葉で表現している」<sup>31</sup>

アムール川流域には、独特の巨大な蛇の登場する神話的伝承を持っている種族もある。その蛇は沼地や割れ目に棲むが、その通ったあとはタイガの山火事のような痕跡を残すという。この形象は、その規模において既に宇宙的である。

「蛇が水中に住むということは、この神話が東部シベリアの森林種族の神話と起源を共通にすることを示している。ツングース族では、巨大な蛇が宇宙の初めに、大地に秩序を与えるための大仕事をしている。神話的蛇のもう一つの特徴である火の痕跡は、大蛇の太陽的本性を直接に示している。それは太陽そのものである。」<sup>32</sup>

28 萩原真子『東北アジアの神話・伝説』（東方書店・1995年）119頁

29 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書123頁

30 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書124頁

31 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書124頁

32 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書125頁



## d 小舟

先に触れたとおり、シカチ・アリャンには北海道フゴッペ遺跡にあるのと同様の舟の図柄の岩絵がある。

その中には、人間の多数乗り込んでいる図像がある。これは、ナナイ族の集落民たちを災いや不幸、悪い力の影響から守る呪術的儀礼であると考えられる。

「このことはまた、死者の信仰あるいは東南アジアの諸民族におけるように、死者の霊を舟であの世へ送り出すことと関連無しとはしない。」<sup>33</sup>

## e 人間態的画像

シカチ・アリャンの岩絵のなかで最多なのは、人間態的画像である。そして、注意深い比較分析を行えば、民族学的資料との一定の符号を見出すことができる。

例えば、何も複雑なディテールがなく、手足もない菱形の顔面だけのもので、輪郭の内側は平行の角で満たされたものがある。これは、ナナイ族の狩猟の守護霊ギリキ・アイヤミの像と類似性が指摘できる。I・ラパチンの記述によれば、「この霊の像は細長い板で、その一端に九つの同じ形の霊、下の方に九つの別の霊が紐でつり下げられているが、その顔面と胴体は黒または赤の絵の具で描かれている。これらのつり下がった霊は菱形の頭をした木像であるが、明らかな横線で便宜的に額が示されている。この霊の胴も同様に菱形で、また上端から下端まで肋骨を示すと思われる角が描かれている。頭には、紐で小像をつるすための耳―突出部がある。これら九つの霊における菱形の頭、菱形の胴体、そこに見られる平行した角、その文様など、サカチ・アリャンの岩壁画に表現された人間態的画像のか

たちを実際において繰り返すものである。」<sup>34</sup>

もうひとつ例を挙げれば、ナナイ族の民間伝承のテーマと岩壁画とが一致するケースがある。これは、背中にマスクをつけた若駒らしい図像である。ナナイ族の「頭の話」という伝説は以下のような内容である。

「ある粘土小屋に胴体のついていない男の頭が住んでいた。それはいつも小屋の中の寝台代りの棚に寝転んでいた。多くの歳月が流れた。あるとき馬が走ってきて小屋にのりこみ、数回まわって頭の前に止まっていなかった。すると頭が動きはじめ、棚の上をくるくると転がって馬の背中にとりついた。馬は再びいなないて、頭をのせたままアムール河の下流方向へ走り去った。」

それから、馬が女シャマン「孤独な女アムフディ・アムチャ」の住む小屋の前に止まったことが物語られる。女シャマンは偶像にたいし、頭が男子に変身するように、その頭を湖に投げ入れるよう命令する。しかし頭は湖中に消えてしまった。それから女シャマンはカモに変身する。やがて、頭の最終的変身と見られる主人公マルゴについての長い話が続く。」<sup>35</sup>

この図像はシカチ・アリャンの存在する多くの岩の中で、極めて奇怪である。馬に描かれているのは、人間的存在のマスクであり、騎士ではない。馬とマスクは同時代のもので一体をなす。この図像は、この種のものとしては唯一神話と一致することが重要である。

「霊の彫刻的表現における顔面のつくりは、疑いもなく木彫技術と関連しており、サカチアリャンの人間態的マスクの伝統的なつくりとよく似ている。…ナナイ族の霊（セベン）の顔面の上部は独立しており、程度の差こそあれ高い三角形をなし、いくつかの場合には垂直の葉がいくつか連なっており、その端末はポールトップ

33 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書127頁

34 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書128頁

35 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書129頁

の飾りの形に作られている」<sup>36</sup>「人間の顔をした偶像の頭飾りまたは端末の飾りは、サカチアリヤン岩壁画のマスクにおける頭上の光線を生き生きと想起させ、両者の発生的な関係、相互の類縁関係を思い至らせる」<sup>37</sup>のである。

#### f 焼き菓子の文様

ウデゲ族とナナイ族にあっては、今日でもマハレブザクラ（ロシア語でチェレムハ）の実でつくる焼き菓子をさまざまな動物態的図文によって飾る風習が残っている。焼き菓子にはヒキガエル、渦巻き、トカゲ、蛇などの図文が描かれる。ウデゲ族によれば、これらの図文は、自分たちの子孫が悪霊とたたかうために助力を与える遠い先祖を象徴している。

この点も、岩壁画と民族学的データとのもうひとつの相似として興味深いものである。

### 9. 採拓作業

日本人研究者によるシカチ・アリヤン等の遺跡調査は、北方ユーラシア学会によって1993年8月28日～9月10日にも行われている。

この調査は、3か所で実施された。1つ目はシカチ・アリヤン遺跡。2つ目はハバロフスクからウスリー川を約70km上流に遡ったところでウスリー川に注ぐキヤ川に面したチェルトヴァ・プリョーサ遺跡。3つ目がハバロフスクから南に約150kmの、ウスリー川に面したシェレメチェボ遺跡である。この調査は、A. P. オクラドニコフを中心に調査実施された1971年の調査の報告を基に、岩絵を含む地形の測量と実測・拓本採取を目的としたが、測量は増水のために

不可能であった。シカチ・アリヤン遺跡はアムール右岸に位置し、第1ポイントから第6ポイントまでの6か所に分かれており、この調査ではこのうち第1、第2および第4ポイントで採拓が実施された。<sup>38</sup>

今回の調査は、2008年の9月29日から10月3日に実施された。実際の採拓期間は9月30日から10月2日にかけての正味3日間であった。アムール川の水量の最も少ない時期を選ぶとともに、拓本の専門家集団を招いて集中的に行われた。専門家集団は大阪に本部を置くアンコールワット拓本保存会という団体であり、アンコールワットでの遺跡の採拓では大いに実績がある。<sup>39</sup>調査の過程は以下のようなものであった。

参加者：

アンコールワット拓本保存会

会長 田中絹子

会員 久藤昭太郎

会員 久藤伊都子

会員 久場勝

会員 林起美代

会員 山内慶順

現地コーディネーター ウザ・グレゴリー

通訳 オーリヤ

ユーラシアンクラブ事務局 井出晃憲

(敬称略)

---

9月30日

まだ薄暗いうちにクラブキャンプ地を出て、朝露の降りた草を踏みしめ河辺に降りてみる。

---

36 アレクセイ・オクラドニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書131頁

37 アレクセイ・オクラドニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳 前掲書131頁

38 鶴丸俊明「極東古代絵画の記録保存、分布調査事業から－サカチ・アリヤン遺跡等の調査－」46-57頁『札幌学院大学学芸員課程年報7』（札幌学院大学学芸員課程・1994年）

39 『神々と王の饗宴 アンコールワット拓本展』（2003年）を参照のこと。

冷えた空気が心地良い。靄の中にアムールの滔々とした流れが見えた。午前8時、ちょうど9月末の太陽が赤々とした顔を出したところである。さっそく皆で河辺にごろごろと点在する岩の下見を始めた。そのいくつかには岩絵（ペトログリフ）がくっきりと刻まれている。

今回の訪問は今年9月29日から10月3日まで。気候がよくアムールの水位が最も低くなる時期を選んだ。ただ、採拓にかけられる実働日はわずか3日という慌ただしさで、後に述べるようにいくつかのトラブルにも見舞われた。

出発の29日にはすでに最初のトラブルに見舞われた。新潟からハバロフスクまでの空路がハバロフスク航空の倒産でウラジオストック航空に移管されたという事情で、飛行機の出発が5時間近くも遅れてしまったのだ。深夜にやっとハバロフスクに到着し、バスに乗り換えてシカチアリャンに到着したのはもう日が変わってからである。保存会の方々は年配であるし、うち3人は前日大阪から夜通し車で新潟まで来られていたこともあって、皆さんお疲れの様子であった。それでも30日の到着翌早朝には、冒頭に記したようにもう下見に出かけたのだ。いよいよ採拓の開始である。

朝食を終えたところに村役場からの迎えの車が宿泊地のクラブキャンプに到着した。何でも今すぐにニーナ村長のところに行ってくれとのことである。

村役場を表敬訪問すると、ニーナ村長のほか、ナナイ民族の伝統文化継承の責任者であるジカ女史、ハバロフスク市から駆け付けてくれたハバロフスク州文化局の考古学担当のラスキン氏がすでに待っていてくれた。ラスキン氏は10年前の日本の岩絵調査団にも若くして参加したとのことで今回の頼みの綱だ。ニーナ村長からの歓迎の挨拶をいただき、保存会の側からは田中会長が挨拶をされ、村の子供たちへの文房具やおもちゃなどの贈呈が行われた。

さて、表敬訪問を終えてさっそく考古学者の

ラスキン氏が岩絵のポイントを案内してくれることになった。今日の採拓は第1ポイントと第2ポイントと決めてある。これらは隣接している宿泊地からも村役場からも徒歩圏の範囲だ。

シカチ・アリャンの岩絵のポイントは、第1から第6までである。その資料は1930年代に当地へ初訪問して以来岩絵を調査してきたロシアの考古学者オクラドニコフによるものである。各ポイントの目ぼしい岩絵の精緻な模写も付随している。ユーラシアンクラブ代表の大野氏からは、出発前に何度か模写をもとにした岩絵についてのレクチャーを受け、各ポイントで採拓すべき岩絵の候補を指示されていた。どれもナナイ民族の伝承や生業と関わりがあったり、周辺地域に類似の岩絵があったりするものである。云わばそれらは物語性を持つもので、今後計画している展覧会での展示のあり方を視野に入れての選択である。

さて、村役場から直接第2ポイントに行き、ラスキン氏の説明を受けながらキャンプ地に近い第1ポイントまでそぞろ歩きする。岩絵の所在を教えてもらいながら後の拓本作業のために目印を付けていく。第1ポイントでの一番の狙いは船を描いた岩絵である。これは、北海道のフゴッペ洞窟にも同じ図案の岩絵があるため、海を挟んだ文化の共通性を唱えるためにどうしても欲しい1枚である。

第1ポイントにてラスキン氏に船の岩絵について尋ねると、それらはすでに摩耗して見えなくなっていたり、砂の中に埋まってしまったという答えが返ってきた。ポイントがどこからどこまでかという指標もないだだびろい河原に岩がごろごろと点在している。はっきりと判別できる岩絵は確かにいくつかあるのだが、人の手で描かれた模様なのか自然にできた模様なのかには判断がつかないものが多い。さらに困難なことには、いたずらで岩が削られているものもある。ロシア語のほかにハンゲルも目立つ。これでは目当ての岩絵を探すのは簡単なことではないなとようやく分かってきた。

ただ、岩絵の所在をよく知るラスキン氏がいっしょにいてくれることが心強かった。ところが、そのラスキン氏は翌日から遠くコムソモリス・ナ・アムーレに出張するとのことで午後4時には帰ってしまった。

それでも第2ポイントには比較的目立つ岩絵の多かったので、拓本保存会の皆さんはめいめい岩絵の採拓本とりかかる。さすがにプロだけあって手際よく作業が進む。現地の協力者であるグレゴリー氏が遅い昼食として温かいスープを船で差し入れてくれたが、保存会の方々の中にはそれに手を付けるのさえ時間ももったいないと作業に没頭される方もおられた。ともかく第2ポイントではそれなりの収穫を納めることができた。人の顔が胴体にある馬や内臓が描かれた鹿など面白い図柄もある。

10月1日

作業2日目である。この日はメンバーを2つのグループに分けた。拓本保存会の林、田中、山内の各氏と通訳のオーリヤ女史は第1グループで、前日に収穫のあった第2ポイントでもう一度採り残した岩絵の採拓をした後、初めてとなる第4ポイントに向かうことになった。拓本保存会の久藤夫妻、久場の各氏と井出は第2グループで、直接初めてとなる第3ポイントに向かうこととした。

前日の打ち合わせのとおり朝8時30分に起床し9時に出発。限られた時間でできる限りの成果を上げようと効率よく準備を進める。キャンプ地近くの川岸から案内役のグレゴリー氏が我々を順々に持ち場にボートで送り届けてくれる。第2ポイントから見て第3はアムールの支流を少し遡上した所、第4はそのさらに上流に位置する。第2グループは先に出発した第1グループが第2ポイントで作業しているのを垣間見つつ第3ポイントに到着し、そこで作業を開始した。鬼のようなマスクやよくはわからないが美人画のような岩絵など面白いものをいくつか発見でき、各自採拓の作業に入った。そのうち

第2ポイントで作業を終えた第1グループが第4ポイントを目指し我々の前をボートで通過しお互い手を振り合った。そこまでは順調だった。

だが、しばらくしてグレゴリー氏が筆者らのいる第3ポイントに一人ボートで戻り筆者に通訳をしてくれと言ってきた。いったいどうしたのだろう？ボートでアムールの中州に来てみると第1グループの保存会の3名の方々が待っていた。グレゴリー氏はここが第3ポイントだと言っているとのこと。だが、オクラドニコフの資料の地図によっても第4ポイントは中州にはなくアムール支流の右岸であることは明らかはずだ。グレゴリー氏にそう説明して皆でボートに乗り川をまた遡上して行く。まもなく支流の右岸の砂地の場所に到着し、ここが第4ポイントなのではないかとグレゴリー氏は言う。しかし、第3ポイントは小さな小川が流れ込んでいる合流地点の川上で河岸段丘の上には墓地があることが地図からも分かるのだが、グレゴリー氏の指す場所にはそのような特徴はない。

ともかく、もう少し上流にまで行ってみようと相談して、ゆっくりとボートを右岸に沿って遡上させていった。すでにシカチ・アリヤン村から離れ隣のマリシェボという町の区域に入った。ほどなく小川との合流地点を越え、丘の上に墓地のある第4ポイントと思われる場所に到着した。さっそく下船して皆で岩絵の探索を開始した。しかし何もない。

砂ばかりで岩すらもない第4ポイントに降り立って私たちは当惑した。よく見れば河岸段丘のはるか上の位置に2, 3の岩絵を確認できたが、それらは高すぎて採拓は不可能だ。拓本保存会の方々は残ったわずかな岩にワイヤーが巻きつけられていることを発見した。明らかに人の手で岩が持ち去られた証拠である。この第4ポイントは、シカチアリヤン村の隣町のマリシェボの管轄地域にあり、マリシェボでは大規模な港湾工事を行ってドックがあり、アムール河を行き来する大型船が出入りしている。この港湾工事のために第4ポイントもすっかり変貌し



てしまったのではないだろうか。何しろオクラドニコフの調査から長い年月が経ってしまっているのだから。

結局何の成果もなく、グレゴリー氏の迎いのボートで、保存会の方々3名、次いで通訳のオーリヤ女史と筆者が、ピストン輸送で第2ポイントまで引き返すことになった。そして、この日の残りの時間は、一番岩絵の多い第2ポイントで保存会の方々が各自気に入った岩絵の採拓に従事することになった。

夜が更けてから、採拓した拓本を見てみようということになり、順番に壁に貼って写真撮影を行った。いろいろなトラブルに見舞われたものの、これまでに合計で32点もの拓本を収集できていた。その中には、美人画のようなものも含まれ、皆で「これは素晴らしい岩絵だ」と見とれた。その後、グレゴリー氏は思い出したように、「第4ポイントにあった岩絵は確か20年ほど前にサンクト・ペテルブルグの博物館に持って行かれたことを新聞で読んだ気がする」と話した。そして、この日に第4ポイントの場所を間違えた自身の失敗に責任を感じたこともあるのだろう、翌日第5・第6ポイントに行く際にはよく知った人を連れてこようと申し出てくれた。しばらくして呼ばれてやってきたのは漁師のミーシャ氏だった。ミーシャ氏と翌日の打ち合わせをしてこの日は眠りに就いた。

10月2日

翌朝早くミーシャ氏が車で迎えに来た。我々は車に同乗して隣町のマリシェボにある第5・第6ポイントに偵察に出かけた。車で20分ぐらい走ったろうか、第5・第6ポイントに到着したが、やはり第4ポイントと同様に砂ばかりの場所だ。自然になのか人工でなのかわからないが、アムールの支流の流れも変わっており、ポイント付近にはすでに水の流れはなく、砂が堆積しているばかりだ。おそらく岩絵は砂の中に埋まってしまったのだろう。せっかくミーシャ氏に正確な場所に連れて来てもらったとはい

え、これでは作業にならない。結局、作業の最終日であるこの日は、一番多く岩絵の点する第2および第3ポイントで採拓し残したものを採ろうということに落ち着いた。

保存会の皆さんは各自それぞれ気に入った岩絵の採拓作業に入った。そのなかで久場氏は、シカチ・アリヤン村のニーナ村長に拓本の採取方法を教えてあげようと申し出てくれた。自分たちの村にある文化遺産を自らの手で保存するということは大切なことである。とてもありがたいお話だ。昨日見とれた美人画のような岩絵を選んで、久場氏はニーナ村長に丹念に採拓の仕方を教えてくださった。さらにその晩には採拓道具一式を村に贈呈までしてくださったのだった。

夕方、採拓を終えた我々は村役場に出向き、役場の中に併設されているナナイ族の博物館を見学した。これにはナナイの民族文化伝承者であるビカ女史が案内を務めてくれた。復元された住居や魚皮の衣服また装身具など貴重な品々が展示されていた。見学を終えて三々五々宿泊地へ戻る。

いよいよ最終日の夕方となった。ナナイの文化伝承者であるビカ女史が子供たちを連れて宿泊地にやってきた。皆はナナイの伝統服に着替え演目の練習を始めた。私たちにナナイの伝統芸能を見せてくれる準備なのだ。

キャンプの建物の一室でその芸能が始まった。演目は、ナナイの子供の遊びや歌や踊り、そして三つの太陽のうち二つを射落とすという神話の寸劇などだった。拓本保存会の皆さんも興味深そうに見入って非常に楽しんでいただけたようだ。

その後、これまでお世話になってきた方々とともに夕食を共にした。

そうして夜が更けていったのだが、ひとつ気がかりなことがあった。それは翌日の出国の際の税関検査である。拓本の持ち出しのためにハバロフスク州政府の文化局から許可証を得ていたが、それは1枚だけである。拓本は大量にあって保存会の6名の方々がそれぞれ荷物に入れて

小分けしているので、1枚の許可証だけでは万が一のことを考えると不安である。それをニーナ村長に話すと、翌朝私たちと一緒にハバロフスク市内まで行き文化局に話をつけてくれるという。ありがたいことである。

10月3日

翌朝まだ暗いうち、私たち日本からの一行7名と案内役であるグレゴリー氏、通訳のオーリヤ女史、そしてニーナ村長が、迎えに来たバスに乗ってハバロフスクに出発した。市内に着くとひとまずインツェリストホテルに寄り、保存会の皆さんはそこで休憩した。私はニーナ村長とグレゴリー氏とともに州政府の文化局に許可証の件で出向いた。対応してくれた責任者はゾーンチン氏という方で親身になってくれた。結局、6名の探拓者が1枚ずつの拓本を参考資料として提出することを条件に、6名が拓本を分散して持っていることを明記した証明書を作ってくれたことになった。

さて、それからが慌ただしかった。飛行機の出発前のわずかな時間で保存会の方々各自が自らの大切な拓本から1枚ずつ選び出さなければならない。そのためにインツェリストホテルに急遽部屋を一室借り、何とか時間までに文化局に提出して許可証を得たのだった。実際には、出国時に何も問われることはなかった。

無事に新潟空港に到着しそこで解散となった。今回の成果であるクラブ用の32枚の拓本を保存会の方々からいただく。今回、保存会の方々には本当にお世話になり、また不手際でご迷惑もおかけした。ここで改めてお礼とお詫びを申し上げます。これから、この拓本をシカチアリヤンの村おこしのため、とりわけナナイの将来を担う子供たちのために役立てなければ、と決意を新たにしました。

## 10 企画展の概要

今回のシカチ・アリヤンにおける拓本採集では、合計32枚の拓本を採集することができた。今後、これらを生かし展覧会を開催することで、シカチ・アリヤンの観光収入を確保するとともに、遺産の保存に努めることが課題である。現在、以下の趣旨で展覧会を開催することを計画している。<sup>40</sup>

### 企画 タイトル

—1万2千年前に遡る北東アジアの古代絵画—  
太陽信仰と生命樹が守る少数民族の聖地  
「300人の村の世界遺産 シカチアリヤンの岩絵展」

### A 企画趣旨

シカチ・アリヤン—この村の名前は、日本の鳥居龍藏、アメリカのパーソルド・ラウファーなど考古学者や民族学者、東アジアに関心のある一部の人々の間では大変有名な、大河アムールの岸辺に累々と積み重なった岩に刻み込まれた古代絵画（岩絵；ペトログリフともいわれる）のあるアムール川のツングース系少数民族ナナイを中心とする漁労民の村の名前である。

古代絵画—。シカチ・アリヤン村の岸辺に存在するこの岩絵は、上記二人の学者だけでなく旧ソ連や世界の考古学者、民族学者が注目してきた。特に旧ソ連シベリア考古学の父と称される故A. P. オクラードニコフ博士がその価値を認め「アジア大陸の古代住民の美術史の中で、アムール河岸やウスリー河岸の岸壁画は特別の地位を占めているが、その中でサカチ・アリヤンのものが特に重要である」と記している。

本展覧会は、北方ユーラシアと呼ばれる地域に存在する古代絵画の中で、①北東アジアの中で最大の文化遺産というべきシカチ・アリヤンの岩絵に焦点をあて、②この世界的文化遺産をと

40 以下は特定非営利活動（NPO）法人ユーラシアンクラブ実行委員会作成の計画資料である。

おして、北東アジア（環日本海）の人と文化の交流、自然と歴史、精神文化、言語や暮らし、芸能、を紹介し、北東アジアにおける自然との共生や多文化共生社会の意義や重要性を多くの方に知っていただきながら、③シカチアリヤンの岩絵とそこに寄り添うように暮らすナナイと呼ばれる人々を中心とした日本海対岸の先住少数民族を紹介するものである。

## B 内容

シカチ・アリヤン村の岸辺に存在する岩絵について旧ソ連シベリア考古学の父と称されるA. P. オクラードニコフ博士は「この驚くべきアムール河岸の他のいかなる古代芸術作品とも異なる異物をひとたび見た者は、もはやこれを忘れることができない。ままたらぬ自然石にこれだけの溝を彫りこむには、どれだけ多くの労力が必要であったことだろう。工具も金属ではなくて、湿った河岸の砂に転がっている普通の礫石だったかもしれない。不思議な怪物を表面に彫りこんだ玄武岩塊は、シカチ・アリヤンにおいて一つや二つではない。画像のある岩塊は全部で103個を数える。これらの全ては、その製作の技法、様式、テーマなどにおいて統一的な文化現象をなしている。そこでは、幾世紀の過去から、なにか統一的な文化史的集団が我々の眼前に現れる。これは謎に満ち、鮮やかで独自の古代世界の断片である」と記している。オクラードニコフ博士は1950年代から60年代にかけて、シカチアリヤンを中心にウスリー川に注ぐキヤ川右岸、その他の詳細な調査を実施し、1971年「アムール河下流の岩絵」と題した報告書を発刊した。その後も多くの学者がこのシカチアリヤンの岩絵に興味を持ち、アムール河の悠久の流れにさらされた岩絵の中には転石し地表から深く入り込んでいる岩絵があることや風化によって消滅している岩絵が多数に上ることに残念な思いを抱いてきた。

シカチアリヤンの古代絵画は1万2千年前に遡る北東アジアの世界遺産。太陽信仰と生命樹に

守られた少数民族の聖地ということができる。

北方ユーラシア学会は、ハバロフスク地方文化財保護委員会の考古学者とともに1993年8月から9月にかけて、風化する岩絵の現状調査と拓本による記録保存を目的に踏査を行った。さらに、NPO法人ユーラシアンクラブは、岩絵を多くの人に普及することを目的に2008年9月から10月にかけてアンコールワット拓本保存会の協力で拓本を採取した。

今回の展覧会は、以上2回にわたり採取された拓本を基礎に、A. P. オクラードニコフによる調査報告書および同著による「シベリアの古代文化」（加藤九祚、加藤晋平訳）またロシア連邦ハバロフスク地方ハバロフスク区シカチアリヤン村とハバロフスク地方先住民族協会、ハバロフスク地方文化財保護委員会の全面的な協力に基づき、NPO法人ユーラシアンクラブが企画した。

## C 展示構成（案）

### <展示方針>

- ①北東アジアの最大の文化遺産であるシカチ・アリヤンの岩絵：古代絵画に焦点をあて、インパクトのある立体模型などの展示をメインにする
- ②日本を含む東アジアの基層文化という視点を強く出し、基礎的な知識の無い観覧者にも見学する意味を持たせる。1万2千年前に遡る岩絵と縄文文化；日本文化の源流。
- ③北東アジア（環日本海）の人と文化の交流、自然と歴史、精神文化、言語や暮らし、芸能・芸術を紹介し、北東アジアにおける、自然との共生、多文化・多民族共生社会の意義、などアジアの時代にふさわしい現代的な課題を展示構成に反映させ、小中高などの生徒にも、教育関係者にもアピールできるようにする。
- ④シカチアリヤンの岩絵と寄り添うように暮らすナナイと呼ばれる人々やアムール・極東沿海地方の先住民族や日本の先住民族アイヌの人々に関心を持ってもらう。

## 11 おわりに 先住民族文化の観光資源化に向けて

シカチ・アリャン村は、数年前の中国黒竜江省の化学工場の事故の影響による河川の水質汚濁のために、主たる生業である漁業が禁止されて存亡の危機に立たされている。それは直ちに同地のナナイ民族およびその文化や言語の危機に直結する。岩絵の採拓は、貴重な文化遺産を日本に紹介するというのが目的ばかりではなく、将来的には文化財保護とその観光資源化によって村の振興に役立てるという意味合いをもっている。村の次世代を担う有望な青年を日本に招いて観光学を研修させるという計画も進んでおり、今回の採拓もこうした地域振興の長期的展望に立った取組みの一環なのである。

このプロジェクトに参加して、今回の調査および採拓を行うことによって、古代岩絵という文化遺産に関して以下のような考えを抱いた。

第一には、文化遺産の管轄権に関することである。2007年9月13日の第61期国連総会において、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択された。その第11条には、「先住民族は彼／彼女らの文化的伝統と慣習を実践しかつ再活性化する権利を有する。これには、考古学および歴史的な遺跡、加工品、意匠、儀式、技術、視覚芸術および舞台芸術、そして文学のような過去、現在および未来にわたる彼／彼女の文化的表現を維持し、保護し、かつ発展させる権利が含まれる。」とうたわれている。

シカチアリャン村の場合、同村に存在する岩絵は、数年前までハバロフスク州の管轄に属し、村が自由にその扱いを決めることはできなかった。岩絵を観光資源として活用することなど不可能であったわけである。それが最近になって岩絵の管轄権が村に与えられたという経緯がある。ナナイの人々にとって、岩絵はいわば民族

のよりどころである。管轄権が移行されたというこのささやかな一歩も、先住民にとっては大きな一歩だ。現在、存亡の危機に立たされているシカチ・アリャン村の今後の発展のために、岩絵の観光資源化をはじめとした様々な取り組みが可能となった。先に触れた国連宣言にあるように、先住民族が自らの文化的表現を維持・保護・発展させることは大変重要かつ当然の権利であると考えられる。ナナイ民族においても今後の動向を見守っていきたいと考えている。

第二には、文化財の記録の方法としての拓本技術の有用性に関することである。拓本技術は、古代中国において複写法・印刷法の一つとして発明され、わが国に遣唐使によってもたらされたといわれる。しかし、墨の文化のひとつである拓本が日本で普及発展しなかったのは、その特性である複写性・記録性のみが重視され、芸術性・創造性を追求しなかったからである。つまり生命感を求める美的表現を疎かにした形写しであったからだという。<sup>41</sup>

拓本技法には、碑面に直接墨を塗る直接法はない。必ず碑面の上に紙を貼り、その上から墨で摺り写す間接法である。原版を汚さずに、原版と同形の文字・文様・図像を表現する複写法である。版画技法は、原版の上に直接墨を塗ってから、その上に紙を置き、原版に刻された文字・文様・図像などを、パレンで摺り写してから剥がす。すると紙面に表現された図像は、原版の図像とは逆方向となり、しかも原版の上には墨が残ってしまう。<sup>42</sup>つまり拓本技法は、原版を忠実に再現でき、また原版を損なうことがない。

文化財という物自体は劣化していくが、拓本は、文化財のある時点での瞬間を実物大で記録できるテクノロジーである。3次元を2次元に写し取るために持ち運びも容易となる。しかも、採拓の仕方によって個性も生まれ、芸術性や創造性という付加価値も発生する。

41 内田弘慈『拓本のすすめ』（国書刊行会・1992年）「まえがき」による。

42 内田弘慈 前掲書36-37頁による。



現在は、採拓した古代岩絵の拓本の展覧会を計画中だが、上述した拓本の特性を生かした展示方法を模索しなければならないと考えている。拓本というテクノロジーの価値を高めるための展示の方策を検討していかなければならない。

最後に、今後に渡って考察していくべき課題は、先住民族の古代文化遺産の観光資源化による地域振興を、日本の特定非営利活動（NPO）法人がどのようなかたちでサポートしていけるかという点である。現時点では、古代岩絵の調査および採拓を行って日本国内での展覧会を計画中であり、その段階までは特定非営利活動（NPO）法人が率先して事業を進めてきた。だが、その後の展開については未定である。先住民族であるナナイ人が主体となって地域振興を進めていくべきであり、その際に特定非営利活動（NPO）法人はどのような関わり方ができるのかを今後実践を通して明らかにしていく必要がある。

## <参考文献>

- 芹沢長介「オクラドニコフ博士とシベリアの前期旧石器」『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社・1982年10月）
- アルサーニエフ著、長谷川四郎訳『デルスウ・ウザーラ』（平凡社東洋文庫・1965年）
- アレクセイ・オクラドニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の源流—』（講談社・1974年）
- 内田弘慈『拓本のすすめ』（国書刊行会・1992年）
- 梅棹忠夫監修、松原正毅＋NIRA編集『世界民族問題事典』（平凡社・1995年）
- 大貫静夫著『世界の考古学』東北アジアの考古学』（同成社・1998年）
- 風間伸次郎採録・訳注『ナーナイの民話と伝説』（小樽商科大学言語センター・1995年）
- 川端香男里、佐藤経明、中村喜和、和田春樹監修『ロシア・ソ連を知る事典』（平凡社・1989年）
- 菊池俊彦「オクラドニコフ博士—その生涯と業績」『考古学ジャーナル』（ニュー・サイエンス社・1982年10月）
- 荻原真子『東北アジアの神話・伝説』（東方書店・1995年）
- 佐々木史郎『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』（日本放送出版協会・1996年）
- 斎藤君子「ナーナイのフォークロア調査報告1」『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第14号（2005年）
- 斎藤君子「ナーナイのフォークロア調査報告2」『北海道立北方民族は博物館研究紀要』第15号（2006年）
- 鶴丸俊明「極東古代絵画の記録保存、分布調査事業から—サカチ・アリヤン遺跡等の調査—」『札幌学院大学学芸員課程年報7』（札幌学院大学学芸員課程・1994年）
- 松本秀雄『日本人は何処から来たか』（日本放送出版協会・1992年）
- 『神々と王の饗宴 アンコールワット拓本展』（2003年）
- А.П. ОКЛАДНИКОВ『ПЕТРОГЛИФЫНИ ЖНЕГО АМУРА』（НАУКА・1971年）